

「石の花」

作者不詳

別府史談会 市外探訪記

平松 卓

前略

石を以って

平成十七年十一月二十日(日)晴天のもと、別府史談会では市外探訪(竹田方面)が実施され、会員など三四名が参加

石語らず

石に語らせ

午前八時、新港町花時計前を大型バスで出発した。出発前、

旅人黙す

旅人を振り返らせむ

永井副会長挨拶に続き、三重野副会長より「西南戦争と豊後

石動かす

中略

のかかわり」について説明を受ける。

旅人 振り返らず

石に心あるを知る時

一 国指定史跡「岡城」(竹田市竹田二九二)

石と人と縁なきか

人の心の扉は開かれ

竹田に着いて案内者の竹田市教育委員会文化財課佐伯治先生から岡城について概略次のような説明を受ける。

後略

岡城は文禄三年(二五九四)二月、播磨国三木城(兵庫県)

「石の花」という詩を読んだことがあります、佐伯先生

のご説明・ご指導を受けながらこの詩を思いだし、語らない

石たちが、何か私たちに語りかけてくれているとの思いに打

たれ、真実対話ができたようでした。

本丸は慶長元年(二五九七)に完成、寛文三年(一六六三)

見学地に歩を進めるごとに、夫々、私の心にたくさん

には西の丸御殿が造られ、城の中心部分とされていった。岡

どもが刻み込まれ、大へん稔り多い一日を終えることができ

城は、山城的殿舎(御廟)・平山城的殿舎(本丸、二の丸、

ました。

三の丸)・平城的殿舎(西の丸)によって構成され、これら

が一体となって一城を形成している。これは近世城郭史上特

駐車場から五分程で大手門下に着く。なだらかな石畳道から急な石段を上がって行くと大手門跡がある。大手門は文禄三年中川氏が入部したときに新設されたが、慶長十六年（一六一一）に現在の位置に変更されたとのこと。古い大手門遺構の一部も右奥に残っている。

桜の馬場跡の真っすぐな通路を通り過ぎると、西中仕切跡、太鼓櫓跡と続くが、この付近は城内で最も通路巾が狭い。この櫓門は城の中枢である本丸・二の丸・三の丸の関門の位置を占める関係から、門番は、役職の侍番が置かれ出入りの監視を入念に行ったという。

昔はともかく現在は、桜の名所として有名であり、また当日は紅葉を求めて県内外から多くの観光客が訪れていた。本丸に上れば正面に祖母・傾の連山や阿蘇五岳、後ろには久住連山がのぞまれ、景色も大変よかった。滝廉太郎像のそばでは親子の犬がじゃれあい、観光客を和ませていた。

三人の家老の屋敷跡、西の丸御殿跡も徐々に整備されつつあったが、発掘が進めば新たな遺跡が見られるかも知れない。西の丸御殿付近で昼食を取り、近戸門跡を見学して七曲りの急坂經由で駐車場に向かう。

## 二 竹田市歴史資料館

最初に佐伯先生の案内で、画聖田能村竹田の絵を觀賞する。竹田は岡藩々医の二男として生まれ、学問・詩文を藩校由学館で学び、洲野真斉・渡辺蓬島に絵の手ほどきを受け、のち南画の最高峰に達したという。説明では、新しく発見されたとされる竹田の作品には偽物が多いとのこと。

考古学の分野で展示されていた短甲は、市内桜瀬地区で発見されたもの、また水田の開発が進み人々が水の豊かな谷あいに住むようになった五世紀初期の農業関係の遺物もあった。天守閣の鯨銚（青銅製）は、明治四年岡城取り壊しの後中川神社に保管されていたが、十年五月の西南戦争の際、神社が激戦地となったために重弾痕が残っている。

会館の奥には岡城の模型（昭和四十五年製作）が置かれている。平山城式で別名臥牛城と云われる。緒方三郎惟栄の築城とされているが、その後を志賀氏（一三代・二六〇年間）、中川氏（一三代・二七七年間）が継承整備して明治維新まで存続したという。今日まで残っていればと悔やまれる。

その他楽聖滝廉太郎、彫刻家朝倉文夫、軍人広瀬武夫などの遺品や記録などが展示されていた。

## 三 願成院本堂愛染堂（国重要指定文化財）竹田市竹田

愛染堂は廉太郎トンネル（メロディトンネル）を抜けて坂

道を上ったところにある。当山の後藤和尚さんより説明を受ける。この愛染堂は、寛文二年（一六三三）に二代久盛公が当地にあった八幡山大勝院（明治八年神仏分離により廃寺）に愛染明王を本尊として建立したもので、現在は大勝院廃寺の後に岡城より移転した願成院本堂になっているとのこと。

堂は、木造・単層・宝形造・本瓦葺の三間堂で、室内は一室で柱がなく、組物などに細工が施された竹田市最古の建造物である。内部の格天井、壁面の飛天などの文様は建物と同時代のもので、極彩色で華やかに彩られている。また軒下の四隅にある天邪鬼は、左甚五郎の作と云われている。附指定された棟札には、天保二年九月の修理銘が残っているとのことである。現在堂内には大日如来、愛染明王、虚空蔵菩薩、不動明王、十一面観音菩薩などが安置されている。

#### 四 久住高原あざみ台

最後の見学地「あざみ台」で景色を眺める。標高一〇三八メートル、三六〇度視界がひらけており、南に阿蘇五岳、振り向けば久住連山が一望でき、自然の素晴らしさを改めて見直したものである。近くに立てられているロマン派歌人と謝野晶子の歌碑に目を向ける。

久住山阿蘇のさかひをする谷の



岡城址にて

外はひださえ無き裾野かな  
特産品売り場で買い物をすませ、帰りの準備をする。長者原経由、一行は一七時ころ無事別府へ帰着した。